QUANTUM ART FESTIVAL

4/4

2026 1.29 Thu. – 2.1 Sun.

Spiral Garden

QUANTUM

科学とアートが交差する、
新しい量子の体験「量子芸術祭 Quantum Art Festival 4/4」

6 つの問いで構成される展示内容と出展作品・会期中プログラムを公開

2026 年 1 月 29 日（木）ー 2 月 1 日（日）まで、スパイラルガーデン（スパイラル 1F）で開催される「量子芸術祭 Quantum Art Festival 4/4」。科学とアートの対話を通して量子コンピュータがもたらす可能性を探索する本芸術祭も、いよいよ今回でファイナルを迎えます。
一連の活動の最後となる今回は、過去 3 回の展覧会等で発表した作品の一部をアップデートし再展示するほか、内外のアーティストの新作を加えていっそうの充実をはかり、量子コンピュータに対する新たな視点を獲得する貴重な機会を来場者に提供します。

テーマ：Rendez-vous Q（ランデブー・キュー）

“Rendez-vous Q（量子コンピュータとの出会い）” というテーマのもと、量子コンピュータをめぐる 6 つの問いに分けて展示セクションを構成。研究者・アーティスト・企業など、異なる立場からその解と可能性に迫ります。

［展示セクションを構成する 6 つの問い］

Q 1 ｜ 量子コンピュータとは何か？
Q 2 ｜ 量子コンピュータがアーティストにもたらすものとは？
Q 3 ｜ 量子コンピュータはビジネスをどう変えるか？
Q 4 ｜ 量子コンピュータに研究者が惹かれる理由とは？
Q 5 ｜ 量子コンピュータにあなたは何を期待するか？
Q 6 ｜ 量子コンピュータに潜む課題とは？

6 つの問いを通じて、「科学」「芸術」「社会」「産業」の観点から量子コンピュータの多層的な可能性との出会い（＝Rendez-vous）を演出します。

本展の見どころ

シリーズ最終回となる第 4 回展は、過去 3 回にわたる試みを踏まえ、量子と人との関係を「未来への対話」として改めて編み直す展示です。

本展では、量子コンピュータをめぐる 6 つの問いを軸に展示空間を構成し、研究者、アーティスト、企業といった異なる立場の視点が交差する場を立ち上げます。科学的な解説にとどまらず、アートや体験を通じて量子の思考に触れることで、来場者一人ひとりが量子技術を自分自身の問いとして捉え直す契機を提供します。

科学と芸術の出会いから生まれる創造的な視点は、研究や教育を超え、社会やビジネスにおける新たな連携や発想へとつながる可能性を秘めています。

参加作家・機関(一覧)

※順不同・敬称略

青木竜太、アラン・ドゥゴベール、飯場康三、池田えり奈、宇津木 健、岡山将也、エイミー・カール、小川雄太郎、勝部暸太、金子涼平、金本成生、金 晃平、桐山登士樹、沓澤真也、久野拓馬、久保田晃弘、佐藤方紀、柴草朋美、清水淳子、ジョンシリ·ラハット、白澤貴司、しりあがり寿、瀬藤康嗣、高村 剛、竹川 諒、竹倉史人、田中 咲、富田隆文、富永泰紀、鳥山耀太、中村健作、長谷川 愛、羽場廉一郎、藤井啓祐、藤原 大、的場浩介、三浦武明、水口哲也、水野弘之、溝口来成、本木祐介、森岡督行、山口尭文、米田 淳、米原丈博、Calories、COHACO Inc.、PUROPUMPULI、Q-STAR(一般社団法人量子技術による新産業創出協議会)、河島建具、日立製作所　ほか

開催概要

名称： 量子芸術祭 Quantum Art Festival 4/4
会期： 2026 年 1 月 29 日(木)ー2026 年 2 月 1 日(日)
時間： 1 月 29 日(木) ー 1 月 31 日(土) 11:00 ー20:00
2 月 1 日(日)　11:00 ー18:00
会場： スパイラルガーデン(東京都港区南青山 5-6-23　スパイラル 1F)
入場： 無料
主催： 量子芸術祭実行委員会
公式サイト： https://www.artfesq.com

お問い合わせ先
量子芸術祭実行委員会 広報担当
E-mail : info@artfesq.com

参加アーティストと出展作品

※紹介する作品の順番は、展示構成順とは異なります。

本展では、過去作品の再編集展示に加え、研究機関やクリエイターとの協働による新作を準備しています。以下に、その一部を紹介します。

特別展示：青木竜太「オルタナティヴ・コンピュテーションズ ― 祝祭の計算文化」

Q 2 ｜ 量子コンピュータがアーティストにもたらすものとは？

東京を拠点に、芸術と科学技術の交差領域で活動する青木竜太は、社会彫刻家／芸術監督として、作品制作および展覧会の企画を通じ、研究機関や多様な専門領域との協働を重ねながら、アートとサイエンス、そして社会を接続する実践を継続してきました。青木の活動は、現代技術を単なる表現手段として用いるのではなく、思考の枠組みや世界理解の前提そのものを問い直す点に特徴があります。

量子芸術祭の一環として開催される特別展「オルタナティヴ・ コンピュテーションズ ― 祝祭の計算文化」では、青木による同名の新作大型インスタレーションを含む計 3 作品を展示します。本作において青木は、「計算」を数値処理や効率化のための技術的操作としてではなく、人間が世界を理解し、自然や他者、さらには不可視の存在と関係を結んできた文化的・身体的な営みとして捉え直します。

慶應義塾大学 量子コンピューティングセンター・センター長の山本直樹教授との対話を重ねながら、量子計算という最先端の科学的知と、江戸時代の日本で独自に発展した数学体系「和算」を参照し、図形的・直感的思考や信仰、身体感覚と結びついていた計算文化を現代的視点から再解釈します。展示空間では、異なる時代や思想、計算原理が交差する場を構成し、機械・自然・人間の思考が共鳴する「別様の計算」のあり方を、空間装置として提示します。

さらに本作では、この空間装置を舞台として、舞踊家・苳英里香による舞踏、茶人・松村宗亮による茶の湯を、身体的プロトコルとして実行します。所作や動き、間や時間の流れは、あらかじめ定められた形式と即興性の往還のなかで展開され、計算がいかに祝祭としての文化的実践となりうるのかを浮かび上がらせます。

苳英里香（ふき・えりか）｜舞踊家

日本列島および東亜細亜の民俗舞踊・神楽・郷土芸能のフィールドワークを通じて、風土につちかわれる身体性に根ざした表現を探求する舞踊家。滋賀・長浜の稽古場「桂花御抄」、京都・里山の檜舞台「山居奉月」を拠点に、身体表現の実践と研究を行っている。
Netflix シリーズ『イクサガミ』神楽振り付け・出演

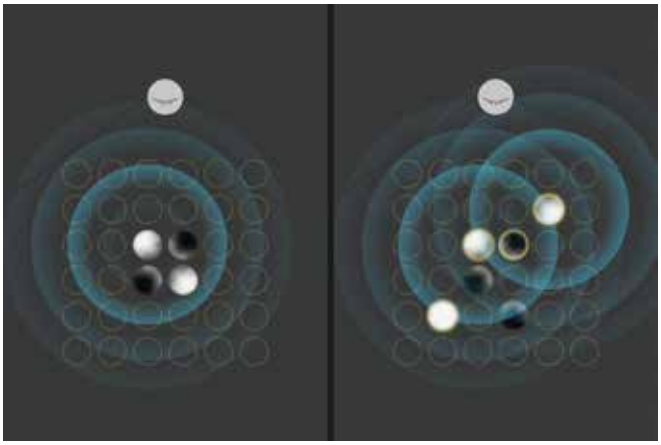
松村宗亮（まつむら・そうりょう）｜茶人

裏千家茶道准教授。学生時代の欧州放浪をきっかけに日本文化への問いを深め、茶道の道へ。「茶の湯をもっと自由に、もっと楽しく」を掲げ、茶道教室「SHUHALLY」を主宰。茶の湯の基本を踏まえながら現代的な表現を取り入れ、国内外での茶会プロデュースや、現代美術・舞踊など他分野とのコラボレーションを行っている。

参加アーティストと出展作品

日立製作所 研究開発グループ《波紋リバーシ》

Q 3 ｜ 量子コンピュータはビジネスをどう変えるか?

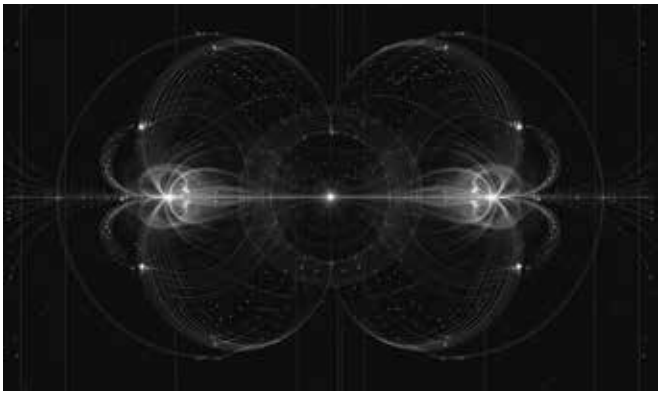


日立製作所 研究開発グループの的場浩介が率いるデザインチームは、プロダクトや UI/UX デザインを経て培ってきた知見を背景に、社会課題の探索や未来像を描くビジョンデザインに取り組んできました。本展で発表される《波紋リバーシ》は、そうした実践から生まれたプログラム作品です。

本作は、将来、量子コンピュータにプリインストールされることを想定した架空のゲームという設定のもと構想されています。古典的なリバーシをモチーフにしながら、「0 か 1 か」「白か黒か」といった二項対立を前提としない量子の世界を、直感的な体験として提示します。量子力学における「0 でもあり、1 でもある」という重ね合わせの性質や、観測によって状態が確定するという考え方に加え、量子が持つ「粒子と波の二重性」に着目した新たなゲーム体験が、量子コンピュータ的な思考様式に触れる入口をつくり出します。企業の研究開発現場から生まれた本作は、量子技術を日常の延長として捉え直し、社会に浸透した未来の風景を想像させる試みです。

エイミー・カール (Amy Karle)《クオンタム・スケッチズ》

Q 2 ｜ 量子コンピュータがアーティストにもたらすものとは?



アメリカを拠点に活動するエイミー・カールは、テクノロジーと人間の関係を主題に、量子科学や生命科学といった最先端の知を視覚表現へと翻訳してきたアーティストです。量子芸術祭では第 3 回にウェビナー・パネリストとして参加し、その思考と活動は多くの関心を集めました。

本展では、彼女の代表的なシリーズ《クオンタム・スケッチズ》を日本で初めて展示します。目に見えない量子の世界や自然界の法則を、線や色、重なりとして描き出す作品群です。抽象的になりがちな量子の概念を、視覚的なイメージとして立ち上げることで、専門的な知識がなくても直感的にその世界観に触れることができます。

本作は、原子よりも小さな世界のふるまいから、宇宙規模でのつながりまで、私たちの存在や世界の成り立ちを支える不可視の構造に静かに光を当てます。量子芸術祭が投げかける問いを補完し、エイミー・カールの思考の広がりと一貫性をあらためて体感できる貴重な機会となります。

報道関係者向け内覧のご案内

会期初日に、報道関係者向けの内覧ツアーを実施します。
展示構成の解説に加え、フィーチャー作品や会期中のプログラムについて、主催者・関係者がご案内します。

日時　　：2026 年 1 月 29 日(木) 16:00 ー 16:45
集合場所：スパイラルガーデン(スパイラル 1F) 会場入口
申込先　：info@artfesq.com (量子芸術祭実行委員会 広報担当)

※お名前(参加人数)・ご所属・メールアドレスを明記のうえ、上記申込先までご連絡ください。

会期中プログラム・インスタレーションのご案内

本展では、展示作品と呼応するかたちで、会期中にさまざまなプログラムやインスタレーションを展開します。作品鑑賞にとどまらず、時間や行為、対話を通じて量子コンピュータの世界観に触れる体験を提供します。

※下記プログラムやインスタレーションの実施は、都合により変更となる場合があります。予めご了承ください。

《オルタナティヴ・コンピュテーションズ ― 祝祭の計算文化》

本作では、この空間装置を舞台として、舞踊家・苳英里香による舞踏、茶人・松村宗亮による茶の湯を、身体的プロトコルとして実行します。

▶ 舞踊家・苳英里香による舞踏　1 月 29 日(木) ー 1 月 31 日(土)　12:30 ／ 14:30 ／ 16:30 ／ 18:30
2 月 1 日(日)　11:30 ／ 13:30 ／ 15:30 ／ 17:30

▶ 茶人・松村宗亮による茶の湯　2 月 1 日(日)　茶会：16:00 ／ 17:00
儀式：17:50

《遺言を起動する量子仏壇は実現できるか？ ― クォンタム・ウィル・アルター》

量子情報科学の発想をもとに構想された展示作品「おりん」を、会期中に参加者が鳴らします。
記憶・時間・継承をめぐる問いを音として会場に響かせるワークショップに参加ください。(先着順 9 名未満)

▶ 実施日時：1 月 29 日(木) ー 1 月 31 日(土)　14:00
2 月 1 日(日)　12:30

※実施時間が近づきましたら、会場スタッフが参加者を募ります。ご希望の方はお近くのスタッフまでお声がけください。

Q6 ｜ 量子コンピュータに潜む課題とは？ ― 研究者によるトークセッション

最後の展示セクション「Q6 ｜ 量子コンピュータに潜む課題とは？」では、研究者によるトークセッションを実施します。
量子コンピュータの開発や社会実装に携わる登壇者が、来場者が会場内で寄せた問いを起点に、量子技術への期待や不安、そして潜在する課題について対話を行います。ファシリテーターの進行のもと、研究と社会をつなぐ視点から議論を深めます。

▶ 実施日時：　1 月 29 日(木)　11:45 ー 12:30
1 月 30 日(金)、31 日(土)　11:45 ー 12:30 ／ 16:00 ー 16:45
2 月 1 日(日)　15:00 ー 15:45

※各回約 45 分程度です。登壇者の都合により、実施時間が変更となる場合があります。

サウンディング：電子チェロによるライブ演奏

量子芸術祭のサウンド「A for Q」を制作したサウンドアーティスト・瀬藤康嗣による、電子チェロのライブ演奏を実施します。
音によって立ち上がる量子の世界観を、会場で体験してください。

▶ 実施日時：2 月 1 日(日)　14:20 ー 14:40

ギャラリーツアー

本展テーマ「Rendez-vous Q」を軸に、展示構成や各作品の見どころを、総合監督の藤原 大が案内するギャラリーツアーを会期中毎日実施します。量子芸術祭に初めて来場される方から、理解を深めながら鑑賞したい方まで幅広く楽しめるプログラムです。

▶ 実施日時：1 月 29 日(木) ー 1 月 31 日(土)　11:10
2 月 1 日(日)　12:00